

Where there is no Vision, the people perish

北九州信徒聖書学校

2011年12月

第112号

月刊

על-פלי מים

流れのほとり

連絡先 〒807-8691 北九州市八幡南郵便局私書箱 26 号 本部 TEL&FAX 093(692)8592
所在地 〒802-0004 北九州市小倉北区鍛冶町 2-3-13 北九州市 YMCA 内
HP <http://bible-school.name/> E-Mail hope_to_tomorrow.y@san.bbq.jp

想い出のクリスマス

前校長 森上 洋介

今年70歳になり、52回のクリスマスを経験しました。クリスマスの恵は格別です。1959年11月、私は愛知県豊川駐屯地にいました。それは、中学校卒業後、少年自衛官に採用されたからです。4年間の教育の途中であった3年生の時に、実戦部隊の研修が始まり9月29日、伊勢湾台風襲来中に豊川駐屯地に派遣され、非常事態下、連日災害救援活動を致しました。救援活動が一段落した頃、どういう訳か、私はキリスト教会に行ってみたくなったのです。

11月、訪ねた教会は、愛知県豊川市の日本アッセンブリーズ教団豊川教会でした。当時自衛官が税金泥棒と言われた頃です。制服で出席した私を、教会の方は歓迎して下さいました。その日の内に聖書と聖歌を買い、楽しみに毎週礼拝に出席しました。12月になり可愛い会堂にクリスマスの飾りつけ、説教を聞く、そして聖歌隊の練習参加など、何もかも初めての経験でした。翌年3月、他の駐屯地へ移動しました。この豊川教会での礼拝出席は15回ほどでしたが、後に信仰を告白

し洗礼を受け、5年間勤務した自衛隊を退職し、牧師を目指して、神戸市の関西聖書神学校に入学する土台を作ってくれた教会です。

1962年4月、関西聖書神学校に入学しました。やむ得ない理由、3年生修了後で2年間休学し、7年間学校に在籍の末に卒業しました。神学校での毎年12月初旬は、畳敷きの講堂に教授、講師、神学生全員が集まり、この時だけは豪華な？すき焼き鍋が用意され、クリスマス祝会が開かれました。2年生の時だと思います。会は進み、説教と教会史の長谷川計太郎教授が立ち上がり、飄ひょうとした口調で俳句とも川柳とも区別つかない痛烈な自作句、「何を喰い何を飲まんとてクリスマス」と披露され、世俗化した日本の社会にあって、教会のクリスマスは、「主イエスキリストに目を向けることだ」と警鐘を鳴らされました。クリスマスが来るとこの句を思い出します。

1967年4月、神学校に復学。戦前の英国風の校舎とすき焼き鍋を囲んだ和風の講堂は3年前に改築されて鉄筋コンクリート建築になっていました。最後に残っていた女子神学生の寄宿舍「聖泉館」も、この年の10月に完成しました。当時、女子神学生は3年で

卒業したので、4年生は男子だけで、児玉さん、宮崎さん、広田さん、それに復学した私の4人でした。2学期も終わりに、宮崎さんがこんな提案をしました。「すべてのすき焼き鍋をやめて、神学校周辺の人々に招待状を出して塩屋の山のクリスマスという伝道集会を開いたらどうだろうか。近所には外国人も多いから」と。

確かに神学校周辺は1930年(昭和5年)にイギリス人貿易商、A・W・ジェームスが自宅を含めて、60棟以上を開発したので「ジェームス山」と呼ばれる高級住宅地となっていました。1967年頃も住民の半分は外国人で、豪華な家に住む外国人の姿を見ると何か日本離れした風景でした。宮崎さんの提案を学監の向後先生は、「伝道することは良いことだから神学生全員で協力してやりなさい」とあっさり許可され、経費も学校会計から補助して下さったようです。

学年集会で協議し、児玉さんは最年長なので総責任者兼説教担当、広田さんは一番若いので総務兼事務局長、私は休学中の仮牧師の経験があったので企画と全体の調整役と決まりました。この計画は神学生全員の協力のもと、早々に準備が始まり、互いに賜物を出し合い、神学生一同心を合わせ準備し、祈りに祈って、日本語と英語の招待状を戸別訪問で配布し、当日を迎えました。結果は大成功、200人以上の人々が集まり、外国人家族の顔も相当にありました。この集会が後に、子供集会、そして大人の礼拝となり、一つの教会を生み出したと聞いています。

この塩屋での経験は、その後のクリスマス集会の雛形となりました。近くは第34、35回の北九州市民クリスマス実行委員長としての奉仕に生かされ、40年前に学んだ応用でした。何事をするにも、祈りと協力者の輪を広げ、各自の賜物を活かすことの大事さを教えられます。大分県の佐伯教会での奉仕では、

教会から遠方の佐伯駅近くまで12km歩く、猛烈なキャロリングが10年間ほど続きました。小倉教会に赴任してからは「長行チャペルクリスマス」を開催、今も続いています。

2001年12月、二度目の大きな心臓外科手術を小倉記念病院で受けました。術後の回復期に入ったある夜、病院の一角から綺麗な「きよしこの夜」の讃美歌が聞こえて来ました。何事かとベッドから起き上がり、看護師詰め所に行くと、看護学校の学生さんが真っ白な制服で、手に灯りを持ちながら、キャロリングで病棟を廻っていたのです。私は小声で唱和しました。3番の「きよしこの夜 み子の笑みに めぐみのみ代の あしたのひかり かがやけり、ほがらかに」を歌い終わると、これがクリスマスだと思いました。目頭が熱くして、心の中で「看護学生さんありがとうございます」とお礼を言いました。

今年の3月11日以来、日本は未曾有の試練の中にあります。これまでの常識が全部否定されたような気分です。希望はあるのでしょうか。あります。悔い改めて、恵のみ代の朝の光の実体である、主イエスキリストさまに目を注ぐとき、そこから万物更生(復活)の新しい働きが見えてきます。私はそう信じ祈ります。「天上では神に栄光あれ!地上では人に平安(平和)あれ!」と。

(前日本イエスキリスト教団小倉教会牧師)

ヤコブは眠りからさめて、「まことに主がこの所に、私はそれを知らなかった。」と言った。彼は恐れおののいて、また言った。「この場所はなんとおそれおおいことだろう。こここそ神の家にほかならない。ここは天の門だ。」(創世記28章16、17節)

30年来の信仰を

さま変わりさせたディボーション

六本松キリスト福音教会

牧師・医師 折田 泰彦

私の母は戦争未亡人でした。残された3人の子供を、宮崎の田舎の開業医であった母の兄（私の伯父）の許に預け、手に職をつけるために上京しました。その間、小学校時代を儒教的な精神風土の伯父の家で過ごしました。中学、高校を経て、大学入学とともに福岡にやって来た私は、若者特有の真面目さと共に心の片鱗に、性に対するある種の後ろめたい罪意識を持っていました。

私が求道の門を叩いたのは、六本松の福音派の教会でした。聖書の教理を徹底的に教えられ、救いの確信（それは倫理的、知的でした）が与えられ、洗礼を受けました。そして、聖書を読む、祈る、伝道する、集会に出席する、の四つを厳守するように指導されて育ちました。

卒業後、婚約して間もなく胃の手術を受け、術後にガンの告知を受けました。医学を心得ていた私はあと半年の生命と覚悟しました。告知を受けた日はぐっすり眠り、翌日が秋晴れの朝であったことを、今でも昨日のように覚えています。

婚約を続けるわけにはいかず、私の方から婚約を解消しました。明け方まで祈って決めた婚約相手でしたので、神様への恨みはありません。「私の国籍は天にある」、ピリピ書3章20節を読みながら、み国のすばらしさにどんなに慰められたことでしょう。そのような慰めと感激をもって読んだ聖書の箇所であっても、私の内に内住される「御霊みずから・・・とりなし」（ローマ書8章26節）によるという理解はありませんでした。

教会の皆さまや元婚約者の祈りが届いたのか、再発せずに過ぎ婚約を元に戻して、私たちは結婚しました。その頃、「胃を切り体力も落ちている、主の働きに献身しないか？」という主の語りかけをたびたび聞いたのに、

色々な理由をつけてその声に耳をふさぎ、私は医師の仕事に復帰しました。

その後は、神経をすり減らし睡眠時間を削る生活が続きました。体力は回復し、医学はもとより問題解決や人間関係の基本を学び、社会人の苦勞が分かり、4人の子どもにも恵まれました。そして、福岡にあるキリスト教病院「栄光病院」の設立に参画できる恵に与りました。また、母教会に専任牧師の必要性が叫ばれ、私は主の召命と確信を得、医師と牧師の二足のわらじで牧師としての働きに導かれました。10数年前のことです。

母教会で一年働いて、自分に明確な牧会理念がないことに気付かされました。その頃、私たち夫婦は「ディボーション・トレーニングセミナー」の誘いを受けていたのです。今さら何をしたのですが、みことばから受ける感動が乏しいことにいささか引け目もあったので参加してみました。数ヶ月の訓練で分かった恵は、私自身のディボーションに感性や礼拝の心、内住される御霊の声に対する敏い心、が欠けていたということでした。

私のそれまでのディボーションは「知」・「情」・「意」の中の知性中心のもので、聖書研究のようなものでした。みことばを読み、その中に書いてある真理や意味が理解できると「なるほど分かった」で終わる。感性が動かされ癒されることもなく、具体的な実践に欠けるものだったのです。

何が恵まれるディボーションの障害になっていたのか。一言いえば忙しい能率優先の生活の中で、それに対応するため、いつしか他の人や自分の気持ちに気付く感性も御霊の語りかけに応じる霊性も麻痺していたということです。

創世記28章を読んでいました。何度も読んだ箇所です。しかし、ディボーションの手ほどきを受けていたので「さあ、ご臨在の前に出て、主からみことばを聴こう。」という礼

拝の心になって、読み進むうちに、私もヤコブとまったく同じ気持ちになり、御前にひざまずいたのです。

主の前に出るという礼拝の心がいつしか戻ってきた私は、ディボーションの時も、聖日礼拝の時も、スーッと礼拝の心になれるようになりました。今ふうに言えば、訓練を通して、この世に対する臨戦モードから、神様に対する礼拝モードになった。聖書的に言えば、私の魂が、生活の色々な場面で、内住される御霊を意識でき、その声に応答できるようになったと言えます。

以前は、御霊が私たちの中に内住されることを頭では知っていても、まだその方を意識できるようにはなっていなかったのです。御霊がとりなしをして下さったことが、振り返って分かったことだったのです。今は、「今あなたの目の前の人は、あなたが愛の手を差し伸べるべき人だよ。」と心の奥に聞こえてくる御霊の声を聞き分けるようになってきました。

今にして思えば、御霊の働きを軽視し、その声に気が付かなかったのです。この頃は、主が共におられるということを意識できるようになり、私の診療も、白衣に身を包み素顔の自分を見せない診療態度から、自分の個人的なことや弱さも話し、患者さんの心を開き、双方向性のコミュニケーションを持つことができるようになっていきました。

忙しい現代の管理競争社会で、他人と他者との競争で能率優先となり、感性や霊性が薄れ頭でっかちになってしまう。以前の私のように。それで、本来の自身を取り戻すためにも、ディボーションの手ほどきを受け、礼拝の心を意識付ける（一定の）訓練が必要なのだと思います。なぜなら、霊性が回復され優しさや感性が戻るにより、主とのつながりが密になり、神の国の恵を少しでも多く味わい、神の国建設のお役に立てるために。

（本文は、去る11月4日、11日に開催された連

続特別公開講義要約である）。

全てに感謝せよ

本科第26期生 廣川 和子

我が家には、結婚式のお祝いに教会よりいただいた第一テサロニケ5章16～18節の聖句が書かれた額が飾ってあります。殊に、18節「すべての事について感謝なさい」は、私のチェックポイント。苛立ちや否定的な思いにとらわれている時、この聖句を口ずさむと主に先んじている自分を知らされます。すべては御手の中の事、最善を為してくださる主に信頼なさいと語りかけられます。

小さい弱い者ですが、主の御用のために用いてくださいと祈って35年。牧師の妻として、山あり、谷あり、嵐ありの様々なところを通らされましたが、自我を碎き、「私に従うのか」と問う主と、挫けそうな時「わたしはあなたと共にいる」と励まし支えてくださる主の導きの中での歩みでした。

今年の春、思いもかけず、夜中に心臓に激痛が来て、地上の生命の限界を現実知らされました。朝が迎えられるのか祈るうちに、突然、「今までの人生を与えてくださってありがとうございます。」という感謝の思いが湧き上がってきました。全てのことを感謝する。私には到底なし得ないことと思っていきましたが、この平安の一瞬が与えられようとは、何たる恵み。休養を求められ義母の介護から離れた時、もう一度、神について、聖書について学びたいと思います。学ぶ場が身近にあり、主がこのような時を与えて下さった事に感謝します。

（日本キリスト兄弟団新下関教会）

編集後記

主のご降誕を心よりお慶び申しあげます。今年もご加禱とご支援に深い感謝を申し上げます。